

---

# 初夏のともしび

橘高 有紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初夏のともしび

### 【Nコード】

N2176I

### 【作者名】

橘高 有紀

### 【あらすじ】

忘れちゃいけない記憶だったのに、どうして忘れていたのだろう。初夏に起こった不思議は、人とのあたたかさ切なさを知るためのものだった。

緑の山間を、歩いてきた。きらきらと葉の隙間から落ちてくる光の中を、鞆背負ってふうふう言いながら。汗をぬぐって地図を取り出すと、指を這わせた。バスを降りて、どれだけ歩いたのだろうか。そろそろ目的地のはずだけど。

先月、じいちゃんが死んだ。二年ほど前から入院していて、会うたび痩せていくじいちゃんの最期に俺は立ち会うことを許されなかった。じゃあまた来るから。そう言っただけで病室を出たときにはまだ元氣そうだったのに……その日の夜中、じいちゃんは息を引き取った。入院しているじいちゃんに誰よりも会いにいつていたのはきつと俺。ばあちゃんとはとくに他界していたし、親は仕事があったからだ。顔を見せるたび喜んでくれたじいちゃんの話をする話を、なんとなく聞きにいつていた。

(じいちゃんがなくなって一月)

だけど俺の生活はなにも変わらなかった。もっと寂しいとか悲しいとか、泣くかとさえ思っていたのに心はちつとも動かなかった。じいちゃんの冷たい身体を見ていたときでさえ、だ。自分でも薄情な奴だと思った。でも、そんなのは俺だけじゃない。父さんも、母さんも、いつもとちつとも変わらない日々を送っていたのだから。

……十年近くを共にいたのに……。

(人が死ぬってこんなものなんだ)

家族がいなくなったのに、毎日はず動いている。じいちゃんが生きていたことさえ、やがて記憶の片隅に追いやられていくのだろうか。

感傷に浸りながら空を仰げば、天井を指す枝がいつぱいに広がっていた。煩いぐらいの虫の音や鳥の声が耳朶に触れるのもどこか新鮮だった。じいちゃんの記憶の場所へ、やっと足を踏み入れたのだ。通り過ぎる道のちよつとしたことが、想像していたままだった。

時折走り去る軽トラや、田んぼや畑でまばらに見える働く人の姿。道端にあふれる雑草と、さびたガードレール。ぼつぼつとあった家屋に、道の途中で見えた蒼然とした神社……。休み休みに歩いたせいか、目的地へ着いたころには、昼をずいぶん過ぎていた。

（この古い家が、じいちゃんの家）

小さいけれど古い門があつて、その奥には木々に囲まれた家屋が見えた。門へ続く道はガタのきた石畳で、そこから家屋を見上げているのである。呆けていたのは、見覚えのある気がしたせいだった。『身体丈夫ちやうかつだから、ちよつと田舎に住んどつた時期があつてなあ。そこで良うしてもらたから、じいちゃん元気になつたんや。ええとこやで、行つてみいひんか、真一』

じいちゃんの声が、時間を越えて耳朵をかすめていくようだった。じいちゃんはしょつちゆう、ここの話をしていたから。

「坂山さんとこの子おか」

首だけをひねれば、そこに少し年のいった男がいた。男は「寺橋です」と名乗り、こちらが名乗る前に俺の名前を言い当てた。なぜ、と問うと連絡をくれただろう、と笑いかけられる。そうだった。じいちゃんがいなくなったこの家の管理を、任せている人がいたのだ。代わりに、うちの田畑を貸していたはず。共働きの両親にとって、この遠く離れた土地は手に余るのだ。

寺橋さんは、「よう来たなあ。迷子にならんかったか」と出迎えてくれた。歩いてきたせいでくたくたな俺を、懐かしそうに見てくる。案内されるまま戸口の開け放たれた家へ入れば、ひんやりとした風が頬をなでていった。雨戸はすべて開けてあつたので、風が通るのだ。気を利かせてくれた寺橋さんが掃除をしてくれていたらしい。ちりんちりん、と風鈴の音が聞こえてくる。

「おおきいなつたなあ……。覚えとらんかもしれんけどなあ、こおんなちいちゃい頃、ここ来たことあつたやろ。よう覚えとんで、やんちゃやったからなあ。修三郎さんが手えつないで歩いとつたんや」寺橋さんは、ごもごもと口を動かしてしきりに話しかけてくれた。

じいちゃんのこと、この辺りのこと、注意すべきこと、昔のこと、明日は祭りがあること……。しかし、ここへ来た記憶などほとんどない俺は、曖昧に微笑むしかできない。何となく懐かしい気持ちになつていたのは、小さいころ、ここへ来ていたからなのだろうか。じいちゃんの昔話なんか関係なかったのか。

夕方を過ぎて寺橋さんの帰った後、やっと俺は畳に横になれた。歩き詰めだったので身体が重くて仕方がない。ぶらん、ぶらん、とゆれるちやちな電灯を眺めていれば、虫の音やこずえの音、近くを流れる小川の音が耳に入ってくる。見慣れない天井は高く、古色を帯びた柱が目についた。元々の家を増築・修繕しているせいで、こんな古い柱はあちこちにあるのだ。小奇麗なのに古い印象が付きまとうのはそのせいだろう。

まだ七時を過ぎた頃だというのに、飯食って風呂に入れば何もすることがない。電気こそ届いているがテレビはないし、電波など届かないため携帯は使えないし、パソコンもない。文明の利器がなければ暇もつぶせないのか。時間が、やけにゆっくり流れている。

縁側まで転がれば、夜空いっぱい星が見えた。夜つて、こんなに明るかったっけ……。ちりんちりん、と聞こえてくる風鈴の音が心地いい。

(こうやって星を眺めたの。じいちゃん)

じいちゃんは十年前までここに住んでいた。ばあちゃんが亡くなってから、街へ……。俺の家に移ったのだ。入院をするまではまめにここへ戻ってきて、掃除や畑の手入れをしていた。俺は、それを知つていて手伝おうとしなかったし、ここへ来たいと思わずにいた。なのに一月以上経つて、今更ここへ来たのは理由がある。この家を両親が手放そうと考えているのだ。じいちゃんの大切にしていた場所が誰かの手に渡る……。そう考えたらいてもたつてもいられなくなり、ここまで来ていた。

(今日は金曜。明日は祭り、日曜に母さんが迎えにくる……)  
それなら祭りが始まるまで、明日は何をしていよう。行かなきゃ

いけない。そんな思いに駆られてここまで来たけど、来たところでどうすることもできやしない……。

思いをめぐらせているうちに何か顔に触れて、眠りは妨げられた。そう、いつの間にか眠ってしまっていたのだ。起き上がってみれば身体がだるく、節々に痛みが走った。敷いてもらった布団に転がりもしてないのだから、当然か。そこで俺は息を詰まらせた。視界の端、縁側にじいちゃんが腰を下ろしている

「じーちゃ……」

身を乗り出せば、それは何かの見間違いだとわかった。瞬きしたら消えてしまった幻に、笑みが落ちた。じいちゃんは一月も前に、この世を去っている。誰もいないに決まっているじゃないか。ここで、じいちゃんのいた痕跡だけでも感じたいと思っていたのか。

ちりんちりん、と音がする。うつむいていた俺は、背後の気配に全然気づいていなかった。だから突然目隠しされて、「だーれだ」なんて言われても、悲鳴をあげるしかできない。

「ビックリするやん！ そんな驚かんでもえーのに」

大声を出した俺を非難するのは、見たこともない奴だった。歳は同じぐらいで、坊主頭だ。田舎くさい格好で、この辺りに住んでいるのだと想像がついた。そいつから突き飛ばすようにして身を離し、詰問する。

「どこから出てきた！ お前、誰だよ。ドロボウか？」

するとそいつは口をぱくぱく開けて、徐々に冷たい顔つきになっていく。

「お前こそ誰やねん。修いさむんちやぞここ。そっちこそドロボウちゃんか。間違ごちがごうたやんか！」

ドロボウだって？

予期せぬ返事に頭が真っ白になった。だってここはじいちゃんの家で、こっちは身内だ。ドロボウ呼ばわりされる謂れなど持っていない！ こいつ誰なんだよ。とっさに思ったのは、寺橋さんの孫だろってことだった。子ども一人でこんな時間にうるつけるほど、

近場に家はないからだ。

(じゃあ修って誰)

まさか、ここに誰かが住み着いているとか？ いや、もしそうなら寺橋さんがとくに気づいているだろう。しかし、こいつは友だちの家に遊びに来たような雰囲気が一向に崩れない。不法侵入を見られたのに、悪びれたところがないのだ。その友だちと間違えたなら、修って奴は俺と同じぐらいなのか。そんなのがこんな所に一人で住み着くだろうか。

(大体ここ、食べるものないじゃん！)

だから今日、寺橋さんは長々とここにいて、親切に夕飯まで持ってきてくれたのだ。

「ここはいいちゃんちだ。修って誰だよ、お前、誰だよ！」

「修は、修や。じいちゃんって、坂山のご隠居はずいぶん前に亡くなつとるやるが」

「だから、あんた誰！」

「俺は新崎 滋しげや。あんたとか言うな、阿呆」

聞き覚えのある名前だったが、カツと頭に血が上る。阿呆だと、このやるう。人の家に勝手に上がりこんで何様だ。しかし、反論はできなかつた。ドン！ という音が響いたせいだ。心持ち体が揺れたような気がする。驚いて目を周りに向ければ、さらにドン、というデカイ音。狼狽するこつちとは裏腹に「始まりよつた」、と侵入者が舌打ちして縁側を降りていった。そこから入ってきたのかよ！ 確かにどこからでも入り込めるが、普通、玄関から来るものじゃないのか。

それはともかく、何の音かと尋ねれば、返事は「花火」だった。は、と当惑する俺の手を、半分座敷に上がった滋が引っ張る。

「ちよいこつち来てみ。ほら、あつこんとこ！」

先ほどまでいがみ合っていたのを忘れたような、こだわりのなさに呆れる。だが、指された方角から暗闇を切り裂く光と音が昇つた。ドン、という音は一拍遅れて聞こえてくる。ぱちぱちぱち、という

火花の散る音。視線が釘付けになっていく少しの間に、次の花火が空をのぼる。祭りは明日じゃ……と思わず呟けば、滋が「はあ？」と素っ頓狂な声をあげた。

「今日、祭りやん。何言ってるん」

ひよつとして、金曜の夜から土曜の夜まで眠りこけていたのだろうか。そんなことはない……はず。可能性を否定しきれず黙りこめば、滋が不審さもあらわにこつちを見ていた。

「なあ。お前、もしかして修んトコの弟？ 弟おるなんて修、言うたことないけど」

「だからあ、修なんて奴は」

知らない、と口走りかけてハツとなる。修三郎、という名前が浮かんだせいだ。寺橋さんが何度か口にしていた名前だった。こいつの言っている修とは修三郎……つまり、じいちゃんのことか？ でも、なんでこんなのが、じいちゃんを修って呼び捨てにするのだろう。

(それに、じいちゃんは、もう)

こいつ、じいちゃんがここへ来るたび相手をしてやっていた近所の子どもだろうか。じいちゃんが他界したことを知らないのか。でもそうなら、さっきの間違われた説明がつかない。いくらなんでも年の差がありすぎる！

「お前、じいちゃん知ってるの？ 修って修三郎？」

慎重に口を開いたこつちとは対照的に、滋は顔を覗き込んでくる。「そう、修三郎。さっきから言うてるやん！ ご隠居の話はオトンから聞いたんやけど？ なあ、修が祭りで帰ってきたんちゃうん？ 明かりついとったから走ったんやで」

「俺は孫の真一。ここ、俺以外誰もいないよ」

「お前もご隠居の孫なん？ 修の従兄弟？ じゃあ修、帰っとらんのか？」

どこまでも平行線な会話に、説明するのが面倒くさくなってあごを引いた。会話が、微妙に食い違っている。どう説明したらいいか、



と考えるのだが言葉が出てこない。ご隠居って誰だろう。そんなことを思いながら、頭をよぎった可能性のひとつを必死に打ち消していた。

一方で庭におりた滋はぶつぶつ「そうか、従弟か。通りで似ているわけや」なんて呟いている。気まずい雰囲気から、そろりと部屋へあがった俺はぐい、と背中を引つ張られた。まだ用があるのか、と身をひねれば、滋はにいつと歯を見せた。

「なあ、一緒に祭り行こ」

はよう、と引つ張られるままに出てきてしまったことを後悔したのは、走り出してすぐだった。

「お前、なんで、道を、走らないんだ」

滋が先導する場所は近道らしいが、明かりもろくくもないのに真っ直ぐ駆けて行くのだ。夜だというのに、山の中や田んぼのあぜを突っ切っていく背中が信じられなかった。がさがさ、と茂みが揺れるたび何かが横合いから飛び出さないか……なんてビクつく暇もない。置いていかれて堪るか、と追いつがるので精一杯だ。しかし、滋はけろりとした顔で、

「だあって、はよ行かな祭り終わるやん、ほら」

呼吸すらさほど乱さず、そう長くない石段の上を視線で示してく。花火見物で何人かが座っているその天辺に、大きな鳥居が構えていた。あの場所から明かりと祭り拍子、笑い声が聞こえてくるのだ。俺は滋を恨めしく思いながらも、そこへの違和感に戸惑いを隠せなかった。何、だろう。多数が着ている浴衣のせいか、来たことのない場所のせいか。

あの古い鳥居が異界への門のように見えた。玉垣がぐるりと囲ったあの場所へ、別種の世界へと橋をかける門。こちら側は、こんなにも静かで不気味なぐらいなのに。

氣いつけて歩きや。すごい人やからなあ。

そんな言葉を聞いた気がして、思わず振り返っていた。神社へとぼつぼつ点った明かりが、真つ暗な夜道を照らしているのみだ。そこをすり抜けて門へ向かっていく、人、人、人……。見知った顔などいやしない。その間にも、空には色とりどりの光が舞っている。

(気のせい?)

「なな、ラムネ飲も。ほらほら」

釈然としないながらも「おう」と返し、ジーンパンをまさぐって…… やつと気づいた。携帯も財布も、飛び出してきたので持っていないかったのだ。ヤバい、と顔に出たらしい。「もしかして、金ないん」とあっさり滋に見抜かれてしまう。取りに戻る、と慌ててきびすを返せば、滋の声が降ってきた。

「おごつたるって!」

ビツクリして向き直った瞬間、背中で火花がはじけた。パチパチパチと火花を散らして落ちる花を見つめた滋は、ええやん、と笑んだ。

「今日は祭りやで。それにお前足遅いねんもん、帰つとつたら祭り終わつとるやるお?」

てつてつて、と降りてきた滋に光の中へ誘われる。暗がりから光のあふれる鳥居の奥へ。石畳に沿って並んだ露店と、溢れるような数の人。この一番奥で構えるのは古びた社。そこへ続く提燈ちゅうちんの明かり。

迷子にならんよう、手えつなごか。

まただ! 耳朶に触れる姿なき声のあるじを探して、首を左右にひねった。人は大勢流れているのに、それらしい人物など見当たらない。何だろう、さっきからこの違和感が続いている。この声は、いったい誰。知っているような声だ。

「ラムネ、こつちやで。さっきから何してるん?」

傍らに立った滋は、不思議そうにこつちを見ていた。目線を泳がせて言葉を濁すしかできない俺へ、ほら、と投げ渡された冷たいラ

ムネは、まだ少し水にぬれていた。

射的に輪投げ、綿飴に焼きそば、金魚すくい、ピンス焼、スマー  
トボール……全部滋のおごりだ。と言っても大半は一人分や一回分  
を二人で分けていたのだが。悪いなあ、と思いつつ「帰ったら返す  
から!」と宣言して借りた。すると「ええって言うとのに、律儀  
やなあ」と笑われる。最初は何だこいつ、と思ったけど滋は人懐っ  
こくてイイ奴だった。多少マイペースで強引だけど。

「あ、あつ! ほら、ヨーヨーあんであつこ! ほら!」

ええー、と嫌がつてみせてもぐいぐい引つ張られる。どれもこん  
な具合だ。屋台が切れた社の前では、休憩している人がたむろして  
いた。そこでターンして、またあの光の中へもぐっていく。ラムネ  
を飲む俺の横を、浴衣を着込んだ子どもたちが面をつけてすり抜け  
た。それを見送って、あ、と思ったのは何故だったのだろう。転び  
かけた子どもが、追いかけてきた親に抱きかかえられたからか。そ  
んな光景が、妙に懐かしく思う。

「お前、ここ初めてちゃうんか?」

滋がこつちを覗き込んできた。

「初めて……のはずなんだけど、何だろ。見覚え、あるような気が  
するんだよな」

困って滋を見れば、奴は吹き出していた。なんでこつち見んねん、  
とけらけら腹を抱えている。それから一通り露店を回れば、最初の  
石段に自然と戻っている。そこはすでに大勢の人で埋まっていた。  
けたたましい音と共にあがる花火が、ここからならよく見えるせい  
だ。

「なあ、修、元気なん?」

鳥居にもたれかかってラムネを呷る滋が、静かに口を開いた。

心臓が、はねる。

じいちゃんは死んだ。そう言えばいいのに、回答を躊躇ったのは  
どうしてだろう。

「俺、なあ。修に会いたかつてん。あいつ体弱かったやろ。だから

こつち来とつたつてわかつてんねんけど……あいつ、向こうで元気なん？ 体調崩しとらん？ 遊びにくる言うとつたのに、来おへんねんもん」

もう三年やで、と滋がしよげるのを横目で見ながら、絡まった謎がほどけていくのを感じていた。ちがう。この可能性に気づいていながら、逃げていたのだ。その蓋が、開けられていく

聞いたことがあった。じいちゃんは、ここに子どもものころ一時期だけ住んでいたのだ。身体が弱かったため、療養する目的で静かなこの山に。家族と離れて暮らすじいちゃんの世話を頼まれたのは、縁のあつた新崎家<sup>ゆかり</sup>だった。今でこそ寺橋さんの暮らしているあの場所、新崎の人が昔住んでいた。

たまに家族がやってくるだけの生活でも、じいちゃんは寂しくなかつたと言っていた。それは友だちが、いつも遊びに来てくれたからだ、と。そのかいあつてか、じいちゃんは十二の歳にはすっかり元気になった。身体もここへやってきた当初とは比べ物にならないぐらい、丈夫になった。街の生活が苦にならないほどに……。

その後はずっと街で暮らして、結婚をして、仕事を退職してからここへ戻ってきた。ばあちゃんが亡くなるまでの数年間を、あの家で。

どうして戻つたの、とじいちゃん聞いたことがあった。不便な田舎にどうして戻つたの、と。こんな何も無い場所に。

「元気、だよ」

声が、震えた。

そうだ、新崎つて名前、聞いたことがあった。じいちゃんの昔話に散々出ていたじゃないか。お隣に住んでいた少年。そのあたたかい家族。じいちゃんを受け入れてくれた人たち。今、横にいるこいつは

「元気で、やっている。いつもここを思い出してるって、言ってた」  
言っていた。だからここへ戻つたのだ、と。

街へ帰っても忘れられなかった場所だったのだ、ここは。じいち

やんが子どもどころ過ぎしたのは、たったの三年。そんな短い時間だったのに、ずっとずっと忘れられなかったのだ。それはきつと亡くなるまで変わらなかったのだろう。入院中だって会いに行きたび、この話をじいちゃんに繰り返していたのだ。

だから……、

「だから俺にも一緒に行かないかって誘ってくれてて。祭りの花火が、きれいだからって……。それで俺、ここへ来たんだ」

何度、水を向けられても、俺は行かなかった。学校があつて塾があつて部活があつて、遊びたくて、じいちゃんの誘いなんかいつでもも行けると思つていたから。どうして、そんな風に思つていたのでろう。次があると、当たり前のように！

ぱんぱん、と花火が打ちあがっている。そろそろ終わりが近いのか、さつきから花火の打ちあがる間がどんどん短くなっていた。傍らで、そうなんや、と滋は大きくうなずいている。満面の笑顔が胸に刺さった。

「修が元気ならええねん。ありがとな、真一。花火、きれいやる？」

修もな、ここへ来たとき、花火きれいやなあて言うててんで。この祭り、あいつ好きやつてん」

ひととき大きな花火が空を彩った。鳥居から出てきた人の波が、俺たちを押し流す。え、と思つたときには遅かった。血の気が引いた。手を伸ばしたのに、滋がその波に吞まれる。滋、と叫んだ。滋、と声の限りに。だけどそんな声は、響いた花火と歓声にかき消された。大きな、大きな花火が目いっぱい映って……。やがて視界は真っ暗になった。

ちりん、ちりん、と風鈴の音がする。

うつすらと瞼をあげれば、覚えのある天井が見えた。がばり、と身を起こして四方を見れば、ここがじいちゃんの家だと思ひ出せた。

水の音と、蛙の鳴き声が聞こえてくる。辺りがまだ暗い。夜だ、とわかった。……今のは、夢？ぐっしやりと汗をかいていた。息があがっている。ぼた、と手に何かが落ちて、頬を涙が伝っていたことに気づいた。

（手が、届かなかった）

子どもだったじいちゃんがここを離れた三年後、あの祭りの日に、滋は消えた。あの石段から足を滑らせて落ちたのだ。かなりの落差があるあの石段だ。その年の夏休み、ここへ遊びに来たじいちゃんは、この一足早い夏の祭りに間に合わなかった

（すぐ隣に、俺、いたのに！）

大切な場所なのにずっと戻れなかったのは、このせいだ。戻ることができなかったのだ。ばあちゃんと二人きりになって、五十年以上も時間が過ぎて、やっとここにじいちゃんは戻れた。ばあちゃん が他界して街中へ越してきてからも、じいちゃんがここをこたわり続けたのは……。

知っていた、はずだった。

小さいころ手を引かれてあの祭りへ行ったとき、じいちゃん言うていたじゃないか。ここで大切な人を失くしたって。会えなかったことを後悔しているって。言うていたじゃないか！あの石段で転がりかけた俺を、必死に抱きかかえてくれたじいちゃんを。人が多いから、手をつなごうか、と微笑んだじいちゃんを。ラムネを買ってくれて、滋と同じように二人で回った露店……。

滋の満面の笑みが、瞼の裏に焼きついていて。あの、ひととき大きな花火と、押し寄せてきた人の群れも。

どうして、忘れていたのだろう。こんな大事なことを、どうして俺が、滋を助けられていたら、じいちゃんはこんな後悔しなくてすんだのに。

（何も、変えられなかった）

もしかしたら、変えることなんかできないのかもしれない。あれが過去なら、変えようがなかったのかもしれない。でも！

(どうして、俺だったんだよ！ どうして、滋に会うのがじいちゃんじゃないんだよ)

涙が止まらなかつた。仰向けに倒れこんで、腕で顔を覆う。じいちゃんに今こそ会いたかつた。だけでもう、いない。こうだったんだよ、と伝えられたらしいのに、じいちゃんはもう、一月も前にいなくなつてしまつた。その喪失感に、打ちのめされた。

悲しかつたんだ……。

ちりんちりん、と風鈴は風と遊んでいた。夜が、明けようとしていた。

母さんがやってきたのは予定より一日早いその日の昼だつた。車を駆れば、たつたの二時間半でここまで来られる。俺が一人だと心配なの、と言う母さんは、雨戸を開け放つた広い家を見渡して感嘆していた。母さんも、来たのは二度目だつたらしい。一度目はこの管理を寺橋さんにお任せする時で、閉まりきつた家しか見ていなかったのだ。

「真一、あなたは三つか四つするとき、ここへ来たことあるのよ。覚えてる？」

「うん。……昨日、思い出した」

面をつけて、じいちゃんに手を引かれて、あの石段を上つた記憶。まだ、ばあちゃんがいて、じいちゃんがここに住んでいた頃のことだつた。

「やつだ、そんな記憶ほんとにあるの？」

「忘れてたけど、思い出したんだ。ちゃんと覚えていたら……よかつたのに」

「仕方がないわよお。だつてあんた、こーんなにもちつちやつたんだもん。でもここ、いいところね」

寺橋さんに挨拶いつてくるねー、と出ていく母さんを、引き止めた。そうだよ。畑もあるし、田んぼもあるし、少し下つたところにある小川はきれいなんだよ。街中より涼しいし、何も無いけど、時間がゆっくり流れるんだ。なんて、言いたいことがたくさんあつた。

だげど頭の中でいっせいに浮かんた言葉、全部飲み込んで、言ったのは。

「母さん、今夜、祭りがあるんだって」

あら、と母さんの顔が輝く。俺は、昨日の不思議を思い返した。切ない気持ちだが、蘇ってくる。だげど上手く笑えただろうか。

「一緒に行こうよ。花火がすごいから」



(後書き)

\*\*\*\*\*

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。  
ご意見感想、お待ちしております。

橋高有紀

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2176i/>

---

初夏のともしび

2010年10月8日15時14分発行